

こうしんとう にちげつ 庚申塔と日月

加藤幸一

1. 庚申塔とは、

腕が六本もある青面金剛（せいめんこんごう）と呼ばれる仏様を本尊とする庚申信仰の石仏である。必ずといってよいほど「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿（さんえん）が見られ、その他に、日（太陽）・月や鬼、時には雌雄の二鶏（にけい）も見られる。

庚申信仰は、六十日に一度やってくる干支（えと）の庚申の日の夜に庚申講の仲間たちが一堂に会し、徹夜して歓談飲食し、夜明けとともに解散する行事である。それは、人間の体の中に潜んでいる三尸（さんし）といわれる三匹の尸虫（しちゅう）が、庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。すると、その報告をもとに判断して寿命を縮めたりする。そのために、その日は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝ないのである。このような庚申信仰は、江戸時代は全国津々浦々で見られていたのである。

なお、青面金剛の読み方であるが、石仏愛好家の間では「しょうめんこんごう」と呼んでいるが、「せいめん」と言った方が耳で聞いたときにわかりやすいのである。

2. 青面金剛の持ち物

腕が6本ある青面金剛は、手には下図のように、弓と矢、杵、剣、輪宝などを持ち、「シヨケラ」と呼ばれる上半身が裸の女人の髪を毛をつかまえてぶら下げている。

また、中央の両手は何も持たずに合掌する姿も見られる。



3. 庚申塔の日月

庚申塔の上部に描かれている日月は、中世に盛んであった日待（ひまち）・月待（つきまち）の影響を受け、徹夜を表すために描かれるようになったのではと考えられている。

日月は、初期の庚申塔にはあまり見られないが、後になるとかなり多く見られるようになる。向かって右側が日（太陽）、左側が月となるのが一般的である。そして両者の区別が判別しやすいようにと、日は円形、月は三日月として描かれたりしている。

4. さまごまな月の形



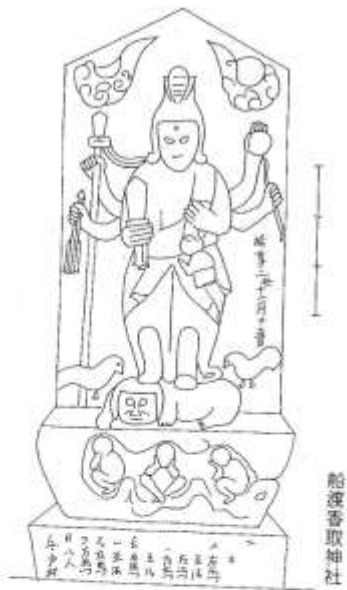
砂原 松沢家「砂原八五〇」こそば踏傍



小曾川 慈眼寺跡



下間久里 平「下間久里六〇」家の踏傍



船渡香取神社



小曾川 慈眼寺跡



平方「女帝」「女体」神社



大間野 光福寺

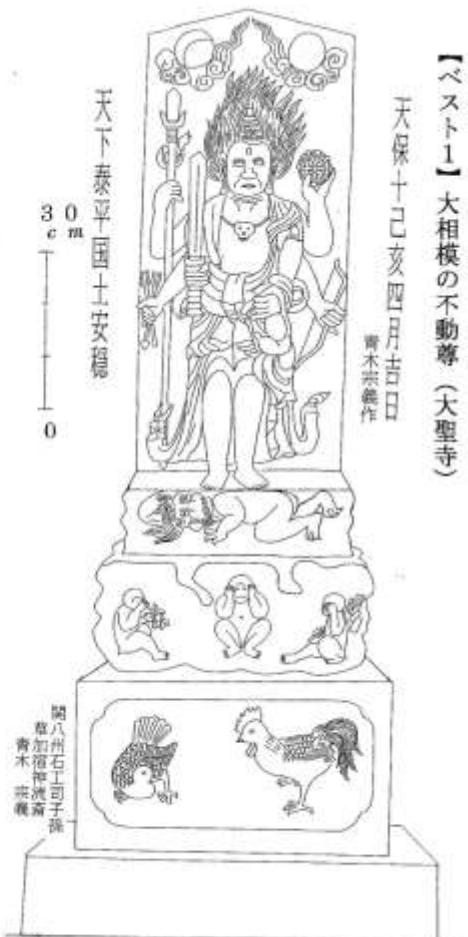


大里自治会館

5. 私が選んだ越谷市内の庚申塔ベスト3 スリー

【ベスト1】大相模の不動尊（大聖寺）

天保十己亥四月吉日
青木宗徳作



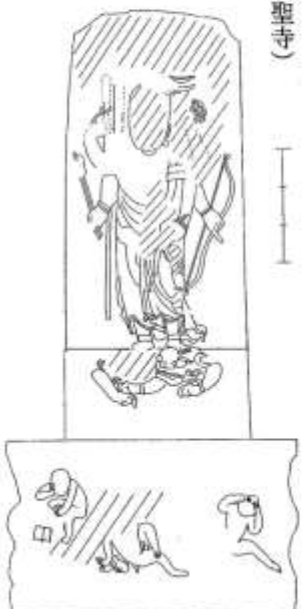
【ベスト2】

七左町の観照院



【ベスト3】

大相模の不動尊（大聖寺）



【ベスト3の解説】
ベスト1

この庚申塔の上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は、頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇が見られる。顔付は、憤怒の形相をなし、三つ目となっている。胸には髑髏の首飾り（瓔珞）を付けている。各手には、弓、矢、輪宝（矛先が八方に出ている）、三叉の矛や剣を持ち、

左手で女人の髪の毛をつかまえてぶら下げている。男尊女卑の表れである。女性の顔が百七十数年間の風雨に晒されて磨滅しているのが残念である。頭上の蛇、三眼、髑髏の瓔珞が描かれているのは珍しく、この三点は『陀羅尼集経』（だらにじつきょう）で説かれている通りとなっている。

青面金剛の足下には天の邪鬼と呼ばれる鬼が踏み潰されている。この庚申塔の鬼は手足の指がそれぞれ三本しかない。その下には三猿がある。山王日枝神社の山王権現の使いの猿が、庚申信仰の庚申の『申（さる）』と結び付き、さらに日光東照宮の三猿（『三戸（さんし）』との説もあり）に影響を受けて三猿となったと考えられている。向かって右端は、神社の御幣を担ぐ見ざるの猿。御幣は神の依代である。中央の言わざるの猿は臍が見られ、その下の陰部も表されていて雌猿とわかる。当時は陰部に朱を塗って下（しも）の病を治そうとする庶民信仰が見られたのであろう。このように陰部がはっきりと表されているのは今と違って当時の性に対するおおらかさがうかがわれる。左端は、猿が女性の臀部や陰部を連想させる桃を持つ聞かざるの猿。猿は性欲の強い動物とされている。桃持ち猿は庶民の間では子授け、安産、下の病の祈願の対象となっていた。ほとんどの庚申塔の三猿は見ざる、聞かざる、言わざるをただ刻んでいるだけであるが、この庚申塔に描かれた三猿は、下の病などに悩む女性を対象にした山王信仰の影響が如実に表れていて珍しい。西方村の鎮守、山王日枝神社からの影響を強く受けたのかもしれない。

申の次は酉、夜明けの鶏鳴を聞いて庚申講を解散することから鶏がよく刻まれている。鶏は雌雄を対にして描く二鶏で表され、青面金剛の下部の両脇に描かれているのが普通である。中には何の鳥か判明出来ない程に簡略に線刻されているものもある。それがこの庚申塔では独立してあり、詳細に描かれている。向かって右は雄、左は雌である。

この青木宗義（そうぎ）の庚申塔は、江戸時代の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にも優れ他には見られない程の庚申塔である。宗義の優れた作品は他にもあり、市内蒲生の清蔵院の地藏和讃による賽の河原の風景を描いた和讃地藏の石仏も素晴らしい出来栄である。関八州石工司の子孫、草加宿神流斎の青木宗義の子孫は、現在の草加市神明一の八の三〇、旧日光街道沿いにある青木石材店である。

ベスト2

この庚申塔の青面金剛は、腕や足に蛇が絡みついている。また、台石に刻まれた四夜叉たちは筋肉が隆々としている。蛇が絡みついたり、四夜叉が描かれているのは、『陀羅尼集経』で説かれている通りとなっている。

ベスト3

この庚申塔は大分破損されてはいるが、百庚申の石塔を統括する為に造立されたもので、欠けずに残っている輪宝（部分）や鬼の顔がとてもよく描かれ、それに三猿のうち中央の猿は男性の性器が、聞か猿は扇子を持って耳をふさぎ読書をしている姿が描かれるなど、細部にわたりよく彫られて、優れた石仏であったと思われる。ベスト1であげた庚申塔の作者である青木宗義の作品である可能性が高い。